

## 北海道長沼町グリーンツーリズムにおける農家民宿事業の現状と課題

北海道大学大学院 環境科学院

環境起学専攻 先駆コース

古賀 友子

### 【背景】

近年は経済のグローバル化が進む中、農村の活性化を求める農業従事者と、「農的暮らし」を求める消費者のニーズが一致した農都交流のアグリビジネスとして、定年帰農や農家レストラン、農業体験学習、農家民宿を中心とするグリーンツーリズムが注目されている。北海道空知郡長沼町では修学旅行生の農家民泊を中心としたグリーンツーリズムが展開されており、開始から 6 年目で予約可能数の 3 倍もの問い合わせが来るほどの成長を見せ、高い評価を受けている。

### 【目的】

長沼町のグリーンツーリズムの歴史と現状を調査して、その成功の要因を解明するとともに、農家民宿を運営する農家側と、訪問者である学校側および修学旅行生の三者の意識を調査することで、現状における問題点と課題を明らかにすることを目的とする。

### 【研究方法】

実際に現地で農家民宿体験による参与観察を行い、グリーンツーリズムを運営・実践する長沼町、受け入れ農家へ聞き取り調査を行った。また修学旅行で農家民宿を体験した学校に対し、教諭への聞き取り調査と生徒への匿名によるアンケート調査を行った。

### 【結果】

長沼町では現在 166 軒の農家が受け入れに参加し、1 度に 300 人の宿泊が可能である。2004 年に「長沼町グリーンツーリズム特区」を取得しており、農家が事業に参画し易くなっていることも特徴である。受け入れは農家のみでなく役場や農協などが協力して町ぐるみで行い、事務局は役場内で役場職員が兼任担当している。受け入れは 5 月～10 月で、道外都市圏の中学生・高校生が年間約 5000 人訪れている。受け入れ先では決まった農業体験プログラムは無く、農家の家族の一員としてその時期の農作業や家事等を手伝う。子供たちは農業体験そのものよりも、農家との交流が印象に残り、帰宅後も手紙や電話など交流が継続する例も多い。

この体験により子供たちの農業に対するイメージがマイナスからプラスに転換し、また全体を通して 96.4%という高い満足度を示すなど、子供たちは「ありのままの農家」を高く評価した。

一方で農家側にも、子供たちとの交流を通じ自らの仕事に誇りを持ち、新たな視点や人脈ができるなどといったプラス面が生じていた。農家民宿の所得は 1 戸当たり年平均 30~40 万円で、主収入の補助的な金額ではあるが、地域の経済効果となると 6000 万円強と算出されている。

### 【考察】

長沼町のグリーンツーリズムの成功要因としては、新千歳空港や札幌に近いという地理的条件、特区の取得、農協や役場など町全体の協力体制、この事業を開始した当時の農協会長の強力なリーダーシップ、以前から企業の農業研修等を受け入れてきた土台があったことの 5 つが挙げられるが、個々の農家が修学旅行生の宿泊・世話を負担に感じず、修学旅行生を、子どもが成長していなくなったあとの「新しい子ども」として受け入れることに喜びを感じていることも大きな要因といえる。今後の課題として、受け入れ人数の調整、役場職員の兼任となっている事務局の負担軽減、修学旅行生の来訪時期の偏りの是正、農業体験などのプログラム改良が挙げられよう。